

監訳の序

長らく自身で心臓麻酔の臨床に携わり、同時に若い人の指導にあたってきたなかで、いつも変わらない基本になるのは循環生理の知識であった。このため、麻酔、そのなかでも特に心臓麻酔を学ぼうとする若い医師には、これまで既存の心臓生理学の本、循環生理学の本を薦めてきたが、そうした本は、往々にして冗長であったり、臨床に直結していない説明が多かったりと、忙しい臨床のなかで重要な骨子を理解してもらうには、不向きな本ばかりだった。

そうしたなかで、もう少し簡潔にエッセンスだけを身につけられる本がないだろうかと探していたときに目に留まったのが「Cardiovascular Physiology Concepts SECOND EDITION」であった。読んでみて驚いたのが、簡潔でいて、しかし、押さえるべきエッセンスははずしていないことだった。まさに、長年探し求めていた本だった。

原著の著者としては、医学部の学生を対象にして書かれているようであるが、どっこい、これが、実は忙しい臨床医にとっても、実にわかりやすく簡潔で要を得た内容で格好の本なのである。

こうした経緯で、この本を訳して、日本の若い人にも役立ててもらえばという思いから、本書の上梓に至った。循環生理の理解が必須となる急性期医療に携わる若い医師はもちろん、振り返ってもう一度基本を確認する意味でも、指導者の先生方にも本書に目を通していただければと思う。

私のような、心臓手術の麻酔に携わるものには、バイブルになることは間違いないが、それ以外の一般の麻酔科医、あるいは急性期の呼吸循環管理に携わる集中治療医、心臓外科はもちろん、外科系各科の医師、循環器内科医などの若いドクターにはぜひとも本書を一読してもらいたい。おぼろげに理解していた内容がクリアになり、小手先のマニュアルで覚えるのではなく、大原則をもとに、自信をもって臨床ができるようになることだろう。さらには、人工心肺を担当する臨床工学技士、急性期病棟の看護師、もちろん、もともとの対象であった医学部の学生にも目を通してもらえば嬉しい。

忙しい臨床のさなか、翻訳の分担をこなしてくれた、6名の先生方には心から御礼申し上げたい。また、その中でも、今回の翻訳の実現のきっかけを作ってくださり、さらには監訳の労もともに引き受けさせていただいた讃井将満教授には感謝の念が絶えない。最後まで予定を遅らせてご迷惑をおかけしていたわれわれ訳者たちを叱咤激励しながら、てきぱきと編集してくださった、羊土社の庄子様、保坂様にもあらためてお礼申し上げたい。

2014年10月

石黒芳紀